# 七福神の来歴

日本の正月を華やかに彩る宝船
そこに乗る七人の神々即ち
七福神の由来について先日
東京大神宮発行の小冊子
「江戸楽」に興味ある解説が
有りましたので紹介します。

**（七福神はどのような神々なのか）**

七福神はインド　中国　日本の様々な神様が集まって構成されている。日本では古代より神仏習合の歴史があり天照大神は大日如来の化身であるとか菅原道真が十一面観音の化身であるなどと言われてきた。弁財天　大黒天　毘沙門天などインドから来た仏が神社で神として祀られることも少なくない。大黒天　弁財天　毘沙門天はインド古来のバラモン教の神が仏教に取り入れられて仏となったものである。

格の高い「如来」や「菩薩」などと比べると仏の中では格の低い「天部」にあたる。福禄寿寿老人は道教の神様で布袋尊は中国の実在の禅僧です。恵比寿は伊弉諾尊と伊弉冉尊の間の子あるいは出雲大社の祭神大国主命の子どもであり天照大神など格の高い神からみれば傍流にあたる。かくして庶民にとって気軽にお願い事ができるのが七福神の神様たちなのです。

**（商工業の発展が福の神信仰を広めた）**

　日本の農村では古代より地方豪族やその領民たちは自分たちの祖先神であり大地の守り神である氏神様を崇敬していた。ところが室町時代に商工業が発達してくると自分の才覚で取引をする商人たちは農村の守り神を祀っても商売の発展は期待できないと考えご利益を授けてくれる福の神を祀るようになり七福神詣でが行われるようになった。

（七柱が揃って七福神となった経緯）

古代の日本や中国の知識人は「七」という数字を好んだ。暦の「七曜」は古代バビロニアの天文学で用いられたものが西洋に広まりインド経由で中国そして日本に入ってきた。又仏教には「七難即滅　七福即生」という言葉がる。七難とは「火難　水難　風難　悪霊難　武器難　投獄難　強盗難」であり七福は「寿命　有福　人望　清廉　愛嬌　威光　大量」でありこの七福に基づいて七柱の神が七福神となったと考えられる。一方中国の「竹林の七賢」が七福神になったとする説もある。七賢とは中国で三世紀後半に活躍した知識人で道教の老荘思想に従って世俗を避けて高尚な清談を楽しんだ七人の文人たちのことである。

また七人の神様が宝船に乗っている姿は日本人が古代より持っている「幸せは海の彼方よりやってくる」という考えから発想を得たものと考えられる。

## 七福神のプロフィール

### （大黒天）

元はインドのヒンズー教の戦闘神の化身で仏教に取り入れられ台所の神とされた。中国の寺院では食物を司る仏として祀られている。日本に伝来後大きな袋を背負った姿の大国主命に結びつけられた。大黒天が鼠を従えた図が多く描かれているのは鼠は災害を予知する能力があり古代の中国人が未来を知る神獣と考えたため。

### （恵比寿）

七福神の中で唯一日本古来の神。烏帽子を被り釣り竿や鯛を持つ姿が特長。漁民の間に古くから広まっていた海からの漂着物祀る習俗が福の神信仰と結びついたとされる。古代の漁民は恵比寿を豊漁をもたらす海の神と考え室町時代以降の商人たちは商売繁盛の神として祀った。

### （弁財天）

ヒンズー教の川の神で仏教に取り入れられて知恵の仏とされた。中国に広まると財運をもたらす仏としての役割が強調されるようになった。インドでは武装して恐ろしい表情をした弁財天像が多く作られたが日本では天女の姿をとる場合が多く吉祥天と並ぶ美しい仏と考えられている。日本では学芸全般の神として信仰される宗像大社や厳島神社の祭神である市杵嶋姫命の別の姿ともいわれている。

R5/1/23（東京大神宮発行「江戸楽」より参照）

一部高橋加筆修筆あり

## （毘沙門天）

元はインドのヴァイシュラヴァという神で後に仏法の守護神とされる四天王の一尊。毘沙門天は常に釈迦如来の道場を譲り法を開くので「多聞天」の別名を持つ。古代インドのバラモン教では知恵の神、金運の神とされていたが日本では戦勝の神とも考えられ足利尊氏や上杉謙信などの武将が守り本尊とした。鎧兜をまとい手には戟（げき）や三叉戟、宝塔などを持つ。財宝富貴を授けて災難から守ってくれる福の神として信仰されている。

## （福禄寿）

中国で祀られた南極星の神で中国の山、泰山の神ともされる。北宋の時代身長わずか９０センチで頭と体が同じ大きさの老人がしばしば「わが身は寿命を益する聖人である」と語っていたといわれる。この姿が後に信仰の対象とされ鶴や亀を従えた形で描かれることが多く長寿の神とされた。

## （寿老人）

　福禄寿と同様　中国で祀られた南極星の神であり老子の化身とも云われ福禄寿と同一説ともいわれる神。日本では鎌倉時代　南宋と関わりの深い禅寺に伝えられた。手にした杖に巻物をぶら下げている姿に描かれることが多い。この巻物は「司命の巻」と呼ばれ一人ひとりの寿命を記したものだと云われている。

## （布袋尊）

中国で九世紀後半から十世紀後半にかけて実在した禅僧で没後布袋尊は弥勒菩薩の化身とする信仰が作られた。布袋和尚は太った体でいつも微笑んでいるためその姿を見た者は幸福な気持ちになったという。また各地を放浪し物乞いした食物を大きな布の袋に収めていた。その袋はいつも食物に満ちており尽きることはなかったと言われる。さらに人の吉凶を占うと必ず当たり超能力の持ち主といわれ福運と大きなご利益をもたらす福の神となった。